

ウィリアム・ジェイムズの実在観

——徹底のプラグマティズムの帰結——

発表者：猪口純 INOBUCHI Jun

コメンテーター：三浦雅弘（立教大学社会学部教授）

司会：佐々木一也

はじめに

「プラグマティズム」とは端的に言って「現に働いているものだけを考慮する立場」であり、それは「プラグマティズム」という言葉自体に含意されていることでもある¹。名称成立の背景や、形而上の議論には一切関わらない実用主義及び道具主義という一般的なプラグマティズム像（多くのプラグマティストの自己了解でもある）からすると、本発表の題目にはやや奇妙な響きがある。

それを踏まえながら尚このような題目を掲げたのは、次のことを主張したいからである。即ち、《ジェイムズの実在論的見解はプラグマティズムの方法と無関係なものではなく、むしろその方法を徹底化した結果として導かれてくるものである》ということ、これが本発表の主張である。ジェイムズにおける思想形成の歩みとしては、心理学的な知見（顕在的・潜在的な意識の存在やそれらの連続性及び相補性に関する研究など）を主な基礎とする実在観・世界観を裏打ちし補強するものとして、追って方法論＝プラグマティズムが見出されたというのが実際のところと考えられるが、本発表は生成史ではなく理論内容そのものに焦点を当て、その帰結を論じる²。

尚、以下に論証を試みる徹底のプラグマティズムの帰結は、そのまま晩期ジェイムズを思想を牽引した根本的経験論の態度に通じている。したがって本発表はジェイムズ自身が峻別していたプラグマティズムと根本的経験論とを、本人の言を半ば否定する形で、地続きの立場であると指摘するものでもある³。

1. 「実在」をめぐるジェイムズの記述

「実在」とは何かということについて、ジェイムズはどのような考えを抱いていたのか。ここではその考えが凝縮されている次の二箇所注目したい。

実在物とは、そこで具体的な事実であるか、あるいは事物の抽象的な種類および事物間に直観的に認められる関係のことであるが、さらに第三に、すでにわれわれの所有となっている他の真理を意味する⁴。(Prag 102=1957: 155)

真理は事実から出てくる、しかし真理はまた進んで事実のなかに浸り入り、事実になんかを付け加える。この事実がまた新しい真理を創造もしくは啓示……する、こうして無限に進んでいくのである。けれども「事実」それ自身は真ではない。事実は単に存在するばかりである。真理は諸事実のただなかで発足してそのなかで終結に達する諸信念の函数なのである。(Prag 108=1957: 165)

まず第二の引用から見ていく。真理から事実への干渉という道筋は、形而上学的思弁の伝統的構図に嵌め込むことができる。だが真理に導かれた事実が「新しい真理を創造もしくは啓示する」という事態は、「真理」という語が意味しているはずの恒常性・永遠性を否定してしまっている点で、従来の哲学との対比においてのみならず、日常的な言葉遣いの観点からしてもかなり奇異なものに見える。「諸信念の函数」という言葉に重きを置けば、観念に導かれた行動が事実を作り、その事実が新たな観念を生むという、素朴でさしたる新奇性のない見方（もっとも哲学では素朴な見方こそ新奇でありうるのだが）と解釈することもできるが、そうであるとすれば『プラグマティズム』全体を通して、またジェイムズの思想全域に渡って保持されている「真」という言葉への拘りが説明できなくなってしまう。

ジェイムズの拘りを伝統的な概念への無意味な腐心とみなすことなく、彼の言う真理と事実との相互交通を理解する鍵は、第一の引

用にある。そこでは〈所有されている真理もまた実在の一樣態である〉という意味のことが述べられている。この文意を引き継げば、第二の引用は次のように解釈できる。実在には二種の異質な様態が存在し、これらの様態は相互に影響関係をもつ。我々が「事実」と呼び可感的なものと認識している実在は、我々が「真理」と呼び観念的なものと認識している実在を絶えず生み出しており、またときに、かつて生じたが不活性となっていた「真理」を再び「事実」との関係の中に引き入れている。一方「真理」は、ときに刺激のもととなり、ときに行動の指針となることによって「事実」に変化を生じさせている。ジェームズはこうした二種の存在次元（潜在的な次元と顕在的な次元）が実在世界を構成しており、我々が普段「真理」や「事実」の名で呼び表しているものは、二種の次元間で起こる諸々の往還運動によって形成・再形成されるものなのだということを示したかったのではないか。

2. 实在論的な読みは誤読か？

上のような解釈は従来、ジェームズによる言葉選びの失敗や語の定義の曖昧さに起因する誤解であるか、プラグマティズムとは独立の見解を含む混濁した記述の仕儀と見なされてきた。例えばジョン・マーフィーはジェームズの記述には「真の観念」と「端的な真」との不幸な混同があると述べている (Murphy 1990: 51-2=2014: 97)。またヒラリー・パトナムは「ジェームズの提案によると、われわれが知っている世界は、ある程度まで、われわれ自身の心の産物であることになるが、私はこんな提案をジェームズがしなければよかったと残念に思っている」 (Putnam 1999: 6=2005: 8) と述べ、同じ場所でプラグマティズムとジェームズの独自見解を赤子と産湯になぞらえている。ジェームズの整えたプラグマティズム (赤子・大事な物) を、彼の行き過ぎた主張 (産湯・不要なもの) とともに捨ててしまわないよう気をつけねばならないという主旨の所論である。

純粹な意味の理論であり、彼自身の实在観とは独立のものであったはずのプラグマティズムが、ジェームズ本人の過失や逸脱によって、実在とは何か・真理とは何かという議論につなげられてしまっ

た——これがマーフィーやパトナムを含む、現在の標準的解釈であると言える。

だが冒頭で述べたことから察せられる通り、発表者はこの解釈に与しない。確かにジェイムズ自身、プラグマティズムは自身の様々な見解から論理的に独立したものであると書いている (Prag 6=1957: 8)。しかしそうした本人の注記にも関わらず、彼の語るプラグマティズムは一種の徹底化を施されたことによって、後の多元的宇宙の学説に見られるような、宇宙を複数種の秩序の競合の場と見る特異な实在観へつながっていかざるを得ないものになっているのである。

3. 如何に〈徹底化〉されたのか？

徹底化されたのはプラグマティズムの「何ものをも前提せず、現に働いているものしか考慮しない」という態度である。ジェイムズの場合にはこれが「何ものをも予断を持って排除せず、現象したもののすべてを考慮に入れる」という、微妙に力点・ニュアンスの変わった言い方で押し出されてくる。

ジェイムズは「現に働いているもの・動いているものにしか関わらない」という消極的な言い方よりも、「現に働いているものを真剣に取り扱う」という積極的な言い方を好む。何らかの実際的効果を（どんなに小さく狭い効果でも）もたらすものなれば、物体であれ観念であれ、「現に働いているもの」「機能しているもの」として扱わねばならない。こうした姿勢はジェイムズがジョン・デューイなどに言及しながら度々説明している道具的な真理観に直結する。

道具的真理観は観念を論じる文脈で概ね〈我々の観念はそれが我々にとって有用性を持つと認められる限りにおいて真である〉と要約される⁵。しかしこのように整理したとき、前提を排するというプラグマティズムの大前提がわずかに破られているように見える。まず「我々の」という言い方（このような言い方をジェイムズは頻繁に用いるが、それが指示する対象は曖昧である）に問題がある。人間存在あるいは人類にとってと解釈すれば個の生存や種の存続に関わる有用性が、我々の社会や共同体にとってと解釈すれば政治的・社会的な有

益性が議論されることになるが、果たしてそれでよいのか。この上「有用性 (expedience)」という言葉も同様に不明瞭である。プラグマティズムの立場からすれば、ある主体の正当化に資するという意味ではあり得ないし、社会や政体に都合のいいやり方という意味であるはずもない。穿った解釈をせず、素朴にプラグマティストの意見として受け取ろうと考えれば、この「有用性」は「適応性 (suitability)」や「適切さ (appropriateness)」に関係するものと考えるべきであろう。

こうした点を踏まえてより誤解を生じにくく且つ『プラグマティズム』全体の記述に照らして矛盾のない言葉を探すと、上の要約は次のように換言できる。

PI：ある主体において適応の機能を発揮するものは、当の主体において真である。

だが依然言葉が足りない。主体はどこに・何に適応するのか。またそれが明らかになったところで、「真である」とは如何なる事態を指示するのか。むしろこの「真である」というところにここで取り除いた「有用性」を持ってきて、〈当の主体にとって有用な道具である〉という言い方にしてはいけなからい。

ジェイムズの言う有用さを「すべての主体が共有する世界との適応」という意味でとり、「真」とはいわば「共通現実」に繋がっていることであると解釈する方法もある（パトナムをはじめ、多くの論者はこの解釈をとる）。この場合、結局「真である」という言い方はうまくないということになる。しかし先にも述べたように、ジェイムズにおいて「真」に関わる語群 (Truth, the true) は、他に置き換えのきかない言葉として使用され、堅持されていた。その言葉によって彼が表現しようとするのは特定主体にとっての真ではなく、「端的な真」なのである。

発表者は多くの論者が問題視するこの点にこそジェイムズ流プラグマティズムの核心があると理解している。そこで思い切ってその言葉遣いに忠実に、さらに語を補って換言してみたい。するとPIは次のように改訂することができる。

P2：ある主体において、それを取り巻く関係性に基づいて生じる観念は、実在の確かな一部分である（局所的に真に実在している）。

このような表現であれば他所の記述との齟齬がなくなり、意味の理論や観念の道具説・整合説などとして捉えるよりもずっと矛盾のない筋道が見えて来る。ここには確かに学的認識の方法から実在論を引き出すという論理的飛躍が認められる。しかし「予断をもって排除しない」という態度を突き詰めれば、このように表現せざるを得ない見方へ行き着くのである。パトナムのような批判者からすると、そこはあくまで作業仮説であることを強調し、「当面の間、実在する“かのように”考えるべきだ」という言い方をすべきであったということになるかもしれない。だがジェイムズは端的に真＝実在するということによって、「共通現実」の指定という、多くのプラグマティストが保持する大前提を覆そうとしたのである⁶。

4. 結語

ジェイムズは共通現実の存在を疑わしいものと見る、プラグマティストとしては特異な実在観の持ち主であった⁷。しかしそれは彼が理解したプラグマティズムの方法＝態度と不可分な関係にある。いわばそれらは連続体を成しているのである。このことを確かめていくと、転じて一般的なプラグマティズムが「共通現実」の存在を固く信じるところに成立していることが明らかになる。つまるところ、ジェイムズとその批判者との関係の裏には、多元的な実在観と一元的な実在観との不和が潜んでいるのである。

ジェイムズも多様を包摂する次元について語ることはある。しかしそれはプラグマティズムの方法から直接に導かれるものではなく、想像的飛躍によって描かれる一つの可能な風景として語られたものであった⁸。プラグマティズムには、それが突き詰められたときにはむしろ「すべての主体は関係を持ちつつも、同一の宇宙ないし同一の次元に存在しているのではないかもしれない」ということを強調する傾きがある。ジェイムズはその傾きを修正しまいとしたので

ある。

〔注〕

- 1 「Pragmatism」は行為や実践を意味するギリシア語の「プラグマ (πρᾶγμα)」を基にしたチャールズ・サンダース・パースの造語である。英語にはプラグマに由来する言葉として、その形容詞プラグマティコス (πραγματικός) から派生した「pragmatic」の他、同じく形容詞プラクティコス (πρακτικός) から派生した「practical」があり、したがってパースがその立場に名を与える際には「Pragmatism」ないし「Practicalism」という二つの選択肢が存在したはずなのであるが、パースがこのうちプラグマティコスの系列をとって「Pragmatism」という名称を選択したことには相応の理由がある。それはカントが二系列それぞれに担わせた含意を踏襲しての選択だったのである。ドイツ語にはプラグマに繋がる言葉として、プラクティコス由来の「プラクティッシュ (praktisch)」と、プラグマティコス由来の「プラグマーティッシュ (pragmatisch)」とがある。カントはこのプラクティッシュとプラグマーティッシュをそれぞれ、道徳的含意のあるもの(「どう行為するのが善いこと・正しいことであるか」に関わるもの)とないもの(「当面の目的のためにはどう行為することが有用であるか」に関わるもの)と見なし、区別して使用していた。カントの区別にしがえば、後者の系列 (πραγματικός – praktisch – pragmatic) には善や正義の観念に囚われることのない、個別的で実利的な判断が属しているということになる。パースはこれに則って「Pragmatism」という言葉を選択したのである。よってこの名称は、それがまったく実利的で実際のな立場だということを語形において示すものになっている。
- 2 おおよそこの見方を共有する文献として、Perry (1974)、伊藤 (2009)、White (1973) が挙げられる。
- 3 「少なくとも一つの誤解を避けるためにことわっておきたいが、私の理解しているようなプラグマティズムと最近私が『根本的経験論』として述べた教説との間には、なんら論理的な関連はない。根本的経験論はそれ自身独立したものである。ひとはそれを全く拒否してもなおプラグマティストたることができるのである」(Prag 6=1957: 8)
- 4 議論の焦点を絞り込むため、また聴者の参照の便宜を考慮して、本発表(本文中)では出典をPragmatism (1907)に限定した。またテキストはハーヴァード大学版全集 (1975-88, F. H. Burkhardt et al. eds., *The Works of William James*, 19 vols., Cambridge, MA., and London: Harvard University Press.)を用い、出典箇所は慣例にしたがい略号 (Pragmatism = Prag, *The Varieties of Religious Experience* = VRE)・頁数で表記した。
- 5 同様の理解に沿った解説の例として魚津 (2006: 136-49)、Murphy (1990: 39-57=2014: 71-108)、仲正 (2015: 135-197) が挙げられる。
- 6 リチャード・ローティがジェイムズを高く評価する理由は、こうした前提への挑戦が彼の反体系主義に合致するからである。ただしローティはジェイムズの唱える真理観には賛同しない。それはジェイムズの真理観が反体系的であるということをおおよそ否定神学的に実体化するものと解せるためである。ローティはあらゆるものを恣意の産物とは決してみなさなかったが、同時にあらゆるものを真理(実在性を有するもの)とする考えも決して受け容れなかった。ローティは学術研究や社会的実践を実在論的な議論に参与することなく円滑に進めていくための方策をプラグマティズムに見出し、ジェイムズとは異なる形の彫琢を施して、徹底した反対系主義のネオ・プラグマティズムを立ち上げたのであった。

- 7 これはほとんどのプラグマティストがとる「實在仮説」、即ち「現実の問題を解決するためにくりかえし『探究』をかさねることによって、究極において、實在という『外部の力によってひとつの同じ結論にみちびかれる』という信念」（魚津2006: 13）をジェイムズが共有していないことを意味する。彼にとってそれは学理的探究や実目的の用には必ずしも要請されない信仰であり、学説としてはあくまで可能なものの一つに過ぎなかった。
- 8 ジェイムズはすべての實在ないし秩序が深い次元で結びついている可能性を指摘する他、いずれ実現するかもしれない結合や調和の可能性を示唆している。裏を返せば、これは全實在が同一次元上に存在すると確言できる根拠が、少なくとも現在の観察事実の中には見出せないという見解を示すものである。全實在の単一次元への回収に対するジェイムズの慎重さは、プラグマティズムを離れたところで上の二仮説を「過剰信仰（the over-beliefs）」と呼んでいることにも伺われる（VRE 405=1970: 382）。

〔文献〕

- 伊藤邦武, 2009, 『ジェイムズの多元的宇宙論』岩波書店。
- 魚津郁夫, 2006, 『プラグマティズムの思想』筑摩書房。
- 仲正昌樹, 2015, 『プラグマティズム入門講義』作品社。
- James, William, [1901]1985, “The Varieties of Religious Experience,” F. H. Burkhardt et al. eds., *The Works of William James*, Cambridge, MA., and London: Harvard University Press. (=1969-70, 榎田啓三郎訳『宗教的経験の諸相』上・下, 岩波書店) [VRE]
- , [1907] 1975, “Pragmatism,” F. H. Burkhardt et al. eds., *The Works of William James*, Cambridge, MA., and London: Harvard University Press. (=1957, 榎田啓三郎訳『プラグマティズム』岩波書店。) [Prag]
- Murphy, John Peter, 1990, *Pragmatism: From Peirce to Davidson*, Boulder, CO.: Westview Press. (=2014, 高頭直樹訳『プラグマティズム入門——パースからデイヴィッドソンまで』勁草書房)
- Perry, Ralph Barton, 1974, *The Thought and Character of William James*, Westport, CT.: Greenwood Press.
- Putnam, Hilary, 1999, *The Threefold Cord: Mind, Body, and World*, New York, NY., Columbia University Press. (=2005, 野本和幸・関口浩喜・渡辺大地・入江さつき・岩沢宏和訳『心・身体・世界——三つ撚りの綱／自然な實在論』法政大学出版)
- White, Morton, 1973, *Science and Sentiment in America: Philosophical Thought from Jonathan Edwards to John Dewey*, New York, NY.: Oxford University Press. (=村井実・田中克佳・松本憲・池田久美子訳『アメリカの科学と情念——アメリカ哲学思想史』学文社刊)

コメンテーターのコメント

コメンテーター 最初に言い訳を申しますと、哲学から離れてもう8年ぐらい経ってしまして、久しぶりに哲学の話を聞きました。拝聴して、ジェイムズが変わったことを言っているという印象は

あまりなく、实在についての考え方も非常に穏当だと感じました。具体的な事実や、種類とか関係というものを实在とみなすというのは、哲学史の上で概念实在論とか、実念論とか呼ばれるものです。それと対極は唯名論ノミナリズムですね。ミケとかタマとかいう個々の猫はいるけれども、猫そのものはいないというものです。あるいは、真理と認められた理論は实在するという考え方があって、これは非常に穏当な、わかりやすい实在観ではないかと思います。

ジェイムズ自身がプラグマティズムは意味の理論だと言っている点ですが、ジェイムズの少し後に哲学では記号論という考え方が出てきて、統語論と意味論と語用論という分類ができます。その場合、言葉をはじめとする記号が何を指し示すのかというのが意味論ですから、当然、指し示されたものの存在論的な性格というのは常に話題になります。意味論は、それ以前の分類だと存在論に当たるといえるのが、その後のごく一般的な解釈ですね。ですから、意味の理論だから存在論を含まないというのは、その後の展開からすると考えないことですね。

また、ジェイムズは19世紀前半に生まれて、1910年には亡くなっている人ですから、英語の使い方や言葉の感覚が我々とは相当隔たってしまっている恐れがあります。ジェイムズの時代に戻って、そのときにどういう言葉がどういうものを指し示したのかということをもうちょっととどまって考察されたほうがいいのかと思います。

それから、「われわれ」という言い方というのは、学術の世界ではわりあい普通に使われる言い方で、やはり普遍性、真理というのは個人の主観的なものを真理とは言わないわけで、やはり普遍的な真理というふうに考えるのが一般的なわけですから、それを「われわれ」という主語で語ることは、そんなに不思議なことではない。ですから、trueであるということは「共通現実」とお書きになっていますけれども、common realityみたいな、common worldみたいなものを指し示すはずだというのも、そんなに不思議なことではないと思います。ですから、誰にとってかというのは、やはりこれはもう全ての人にとってというのが、それこそ真理の定義になると思うので、主観的なものはやはり真理と言い切れないのではないかと。

発表者 ジェイムズの考え方は全く逆で、共通現実というものを否定する方向です。

コメンテーター ジェイムズ以外のプラグマティストが共通現実を信じているということですね。その延長では、多元宇宙論みたいな考え方もあるということです。多元的な実在感を持っていたがゆえに、共通現実に対して非常に批判的だったということであるとすれば、多元的な宇宙論というのも、もう少し言っていたけるとよかったかもしれません。

最後になりますけれども、「はじめに」のところに、本発表は生成史ではなくて理論そのものに焦点を当てていると書かれていますし、そうした立場は当然あると思うのですが、こういう哲学者の哲学というのは、やはり歴史の中でこそ生成するものだと思います。私がよく思うのは、私たちは20年ぐらい年長の人の考えからすごく影響を受けるのではないかということです。必ずしも哲学者だけではなくアーティストなども含め、1950年代半ばに生まれた私なら1920年代、30年代ぐらい生まれの人の意見に影響を受ける。そう考えると、ジェイムズは1840年代生まれで1910年に亡くなっていますから、その20年ぐらい上となると、例えばホイットマンなどが挙げられるでしょう。スーザン・ソントグが「アメリカの一番根本にある感じ方、考え方というのはホイットマンの『草の葉』にあるんだ」ということを言っています。『草の葉』はエマソンのトランセンデンタリズムをすごく色濃く帯びているわけで、その辺の前の世代の考え方、感じ方というものとジェイムズが無縁であるはずはないと思います。

ジェイムズはすごく多面的な人だったと思いますが、最初は生理学などをやっていた。その後の心理学も、ドイツの心理学とは少し違ったものを考えていたわけです。そうするとやはり、当時のドイツというのはヴントの要素主義なので、そういうものに対するアンチテーゼとして、例えば、意識の流れみたいなものを出しているんだと思います。ですから、その意識の流れなどというものは、要素に分割できないので、それこそ非常に全体論的なもので、パトナムがジェイムズが好きだというのはそういう点とも関係していると思います。

少し的外れなことも言ったかもしれませんが、興味深く聞かせていただきました。